

Cocoa株式会社
合田真也
代表取締役



048-299-6679

cocoa-fukushi.com

埼玉県 川口市西川口1-28-17-1階

ビジョン

我々は徹底的にその方の活きがいに寄り添い、住まいのスペシャリストとして多方向から関わらせて頂きます。

今日が過去最高の一日になるように。
人生のハイライト・最高到達地点を目指して。

音楽業界から介護の道へ——。Cocoa株式会社の合田真也代表は、父の介護をきっかけに「介護ベッド」や「歩行器」「車椅子レンタル」といった福祉用具の世界に飛び込みました。在宅介護を支えるプロフェッショナルとして、利用者一人ひとりに寄り添いながら、安心して暮らせる環境づくりを実現しています。福祉用具の選び方やレンタルの仕組みも詳しく紹介します。

音楽から介護の世界へ。川口市で始まった福祉用具との出会い

まずは、合田さんのご経歴についてお聞かせください。

出身は四国の香川県です。高校卒業後、音楽の道を志して東京の専門学校に進学しました。

当時はどのような夢を追っていたのですか？

もともとはミュージシャンを目指して、ギターやドラムを演奏していました。ただ、現実的に音楽だけで食べていくのは難しいと感じ、CM音楽や企業のPR動画に使うBGMなどを作る「職業作曲家」の道を歩むことにしたんです。専門学校卒業後は、プロの作曲家の先生に弟子入りし、アシスタントとして身の回りの世話をしながら現場で学ぶ、いわゆる丁稚奉公のような生活を送っていました。



音楽の道から一転、介護業界に進まれたきっかけは何だったのでしょうか？

弟子入りして3年目の頃、地元にいる父が末期の肺がんであることがわかりました。当時、家族は祖母と父、そして大学で大阪にいた弟の4人。高齢の祖母一人に付きっきりの介護を任せるわけにはいかず、僕が香川に帰ることを決意したのがきっかけです。

お父様の介護をされる中で、どのようなことを感じましたか？

東京での生活をすべて整理して地元に戻り、約10ヶ月間、父の介護に専念し、その最期を看取りました。僕が23歳の頃です。実際に介護を始める時は、正直何から手をつければいいのか全く分からなかったのですが、地域包括支援センターの方やケアマネジャーさんが丁寧に説明してくださり、本当に支えられました。様々な介護サービスを利用する中で、特に介護ベッドや車椅子には本当に助けられましたし、「こんなに親身になってくれる仕事があるんだ」と感銘を受けたんです。

お父様を見送った後、再び上京することは考えなかったのですか？

音楽への思いもありましたが、地元には祖母が一人で暮らしていますし、まだ学生の弟もいました。自分が家族を支えなければという思いから、香川で地に足を着けて働くことを決意しました。そして、どうせ働くなら、父の介護でお世話になった方々のように、自分も誰かの役に立てる仕事がしたいと強く思うようになったんです。

そこから本格的に介護業界でのキャリアをスタートされたのですね。

はい。ただ、社会人経験が乏しかったため就職活動は難航しました。10社以上面接を受けても決まらない中、たまたま父がお世話になった介護ベッドなどを扱っていた福祉用具の会社の求人を見つけました。「この会社で恩返しをしたい」という一心で面接に臨み、雇っていただけることになったんです。それが2010年のことでした。



ゼロから挑んだ福祉用具の道。介護ベッドと歩行器のサポート

介護業界でのキャリアは福祉用具の会社からスタートされたのですね。

はい、入社後は介護ベッドや歩行器などを扱う福祉用具の現場担当者として、先輩に教わりながら介護の仕事のいろはを学びました。同年代の友人たちより社会に出るのが遅かった分、早く追いつきたいという気持ちが強く、最初の3年間はがむしゃらに働きましたね。

当時の働き方はどのようなものでしたか？

今では考えられないかもしれませんが、朝は7時に出勤して夜は23時頃まで働くのが日常でした。営業から介護ベッドの準備、歩行器の配送まで全てを担当していたので、とにかく時間が必要だったんです。特に、メンターとして指導して下さった先輩が非常に熱心な方で、その姿に引っ張られるように仕事に打ち込んでいました。

その後、営業所の責任者も任されたとお聞きしました。

入社して5年目頃から営業部門を任されるようになり、6年目には県庁所在地である高松市に新しい事業所を立ち上げるプロジェクトの責任者になりました。物件探しから事業計画の策定まで、ゼロから拠点を作り上げる経験をさせてもらい、「いつか自分も独立したい」という思いが芽生えたのはこの頃でした。



責任者として、どのような点に苦労されましたか？

一番は人材育成、マネジメントですね。介護の仕事を選ぶ人は心優しい方が多いのですが、福祉用具の業界は営業的な側面も強く、目標達成への意欲が求められます。例えば、緊急で介護ベッドの納品が必要な場面など、優しさだけでは乗り越えられない場面で、スタッフたちの意識をどうやって引き上げていくか、そのバランスに非常に苦労しました。

具体的にどのように乗り越えられたのですか？

朝礼で各々の目標を発表させたり、担当エリアの責任者としての自覚を促したりと、地道な声かけを続けました。僕自身が「この仕事は、ただ介護ベッドや歩行器を届けるだけでなく、利用者様の生活を豊かにし、感謝される素晴らしい仕事なんだ」ということを、背中で見せ続けることを意識していましたね。

ご自身の経験が、スタッフを導く上での指針になったのですね。

そうですね。父の介護を通じて、利用者様やご家族が本当に求めているものは何かを肌で感じていましたから...



続きはQRコードからアクセスしてください → → →